激觴無底杓

特別
へ12
1077
7

利
1077
67

1077
7

未摘草

私源氏君十七歳乃春より事

玉ゑ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大将殿御婦詣事

未摘草巻之

臘月廿六日 法皇御八講事

頭中將宣隆朝臣傳勅使事

同時源氏女房中將同車向大殿御方
令物言事

源氏女房中將語尚侍殿事

源氏童病事

為紫卷乃始と同時乃事と様の
事

一 廿七日 ハ
八月廿日始見参事

某殿院行幸事

源氏君達消息事

於常寧殿常侍始事

於大殿御方今習舞樂事

冬法會事

源氏女房事

女房著新衣事

右文為證如件

使隨身拂拭樹雪事
歲暮常陸介文幹君送御裳事
源氏拜事
源氏給返歌事
歌求子哥給事
十八歳
正月七日宮常陸宮事
翌日還二条院ニ紫君獻紙事
平仲物語事

末摘花
似哥并詞為巻名
末摘花を
泊瀬もを
さしそそ
私何もの巻名ともなりけり
付巻いろ〳〵紫ゆへ横笛乃巻し源氏君
十七紫の春より十八紫ゆへ春ゝ

寿永十七歳の二月廿日改元ありて元暦と号す
元暦の前ちかきころのまつりごと
筆・無撰・豈れ

元暦二年十八
集の事よりて後鳥羽院の御
もとうり無てよりて
倩の事し未摘ものし咲下
前し如号咲うて
次第てよりて未だ
いまし蔓(アフ)纏(ヒカヅラ)乃
そのうを
集日前集まてより以前乃事も

葵上云条御息所
或枕御祝ゟ葵上
ちとの行そ御息所
仏みてましいつれも
をとし

走り祝そ

紫仏を毛ふるもの
仏みてまのいと
可烏相如琴心
も

桃（イトム）と
なる
いさうかそれ
う此仏詞と
仏よ叶ふ
桃（秘）詞
関出ふそ
紫日桃（ぴ）
伝し妻ノ

廣白ニ桃撥ト注ス撥ハ
支妻の間如

萩乃葉も
（異）
かりの萩事
（秘）
ほりけれとこれも
（秘）
新墾の萩葬らふ時の事
大こと名物うつす物ことそ
（秘）
名いさりける
（秘）
深の性をとくしてい号よる此
葉の性之説物語の作者の批判し
如此深重の性と説くよりて細かと

許婚して仮令女の妹の縁にて
かさ夜ようの
とうけんそあ
拾遺つ兄源平の妹し 妹やうな
の事い妹に
妹うう 兄し
婚よせてそ
もうそ
ふ弟をとひ

第つ乃兄そ
兄系圖のか
源のめのとし
そ以て第つの
ものし

大納乃室婦
兄源のかめ
内よりつ妹
大納室婦

円裏よりとし

ことをもて無つま大痛
王孫をもてし
箕仆 王家 世雄 亦不倫
(經)
かりそめにても乳母る一人を
ほんとをもて一人を大就のごとく
一統我亦不倫 又和漢通 ナラヌ
するごとく
箕仆の箕すり 仆ハ異之
孫し

君もかしこし

母を箕前るれ書りて
箕仆大痛 命婦う母を第つ乳母し
和い王孫の無つま大痛う書りて大痛
命婦とをもて王孫の箕前るう書
そひそひて王周せし
実父より前の書
母うう 箕前い結又し

筑前守 左衛門乳母ノ後ま無戸大納
言大納言局婦人ら紙母
ら云ふことを宣ひて
筆日母ハ新まよそうして筑前ま
よくされて継母いもうしそれとも
寛文の方よりうしまり
ゐ
ゐ
ゐ

こゝろの友として

今日北窓下
飲酌得三友

琴罷觴挙酒
三友遞相引

一弾慌中心
猶恐中有間

白氏文集六十二北窓三友

樂天が小窓の三友琴詩酒と

自問何所為
三友者為誰

酒罷觴吟詩
循環無已時

一詠暢思文
以醉詠終之

いと安らかなるとそ

人もし約束ありて客を待つに

こゝて酒のうくの話し

いと一くつろぎ多くて

女房のれて待つの事し

酒とゝのう

酒乃事し花四一斛如何海

多う祖待いの

くん事うの次

我乃言ふ事を
仏人乃名と見せて
事也
或物云仏物ゝ
それと言ふ人乃
ゆゑ
乃それを云ふ人
当人ぐそ
(秘)
未摘ゆゑ

(元)
伯子卿と発すれそ鐘ゐ朝言と
云ふるゆゑ
(行)
卿乃言ときて
なゝり今うゝ
もすくつき
笠義よそれを
乗ゐる仏事を
(牛)
牽物とさして
乃り

百姓よりうつくしく
百姓(も)よりものうく
常(つね)ねうらやましく
とも　一生百姓よりも
まさる再(ふたた)びうまれて
まてともとも
今(いま)婦(おんな)い百姓よりうつくしく再
うらやましく
私(わたし)ハ常(つね)ねうらやましく

男(おとこ)ともうらやましく
いうこゝろねうと
常(つね)婦(おんな)ハし原のかた思ひてれ少(すこし)ハ
うとまるゝこゝろ
物(もの)ねうらやましく
原のハし男(おとこ)いうこゝろ
生(うま)まれるゆへ
まいあゝねとうらやましく
ひをいうこゝろまて

源乃朝臣
[illegible]
[illegible]
[illegible]

いろいろ
ふる

ちぐさのなわきも
行
下よ物し

君いるもれも

浦いいもる次中
ふりそそ

次中将の朝
ふる

みせないさもひろ
筆の浦と次中
大内とうひて
方とうの絶
大内山の大内
筆竜云大内山
もろうの内裏
日本紀よ内裏
承和改大内寺

定寺ニ大内山ヲ
ヲ〳〵
ノリとうく大内山乃山ヲもり奉
まのうれてのこ月を見る事
等ニ之勅入分ヶ候
名所ノ大内山ノ事宇多院ノ山陵
大内山ニアリ仁和寺ノ西ニ
伊勢ニ有よし申候
の松風すこし吹とうとう

文永五年ノ山陵使不知此所ヲ
兼平三四六若狭国所献之雉放於
大内山ヲ〳〵笠置
私
私右掌ノ分ヲ
大内山ノ名所ニそも何をもそそ
ハ云禁中とさしてし
等いさゝかの月 笠置ニ
乃ち松遠ク
月をうつして

とりあつめ
第四いさよひの夜すゝふ九郎
夜すゝふ月よりまて入方と
云ゝさるへし
うつもれと
又中将乃めのと
源乃ちよいとりてうつもり
こゝろ君と
頭(カミ)中将と見給ふ
人乃思ひうらめ
源の氏中将とのうつり
みつ
源(ミナモト)
里うらめ乳とり
みとれうる
里(サト)うらめ月の
うこの八さ月
うさうり
むとうつ

しるして出でよひそかにと
そうそうにいさゝか
源と云中将のもとへ先
遣ともみ文ばかりにて
こゝろもとなくおぼしめし
うみそれ(松)
源のもとへうつ
これとゝもに事
おうそうけみもそれ

ほとゝぎす
ゝゝさゝゝよ
筆の初し墓
何まえて
同去年のれうの
或物よそれみもそれ
ひとの車よ
源と云中将とたひ
袍(ほう)にて同車(くるま)にて云中将

いるうしろの源乃介車うえ
おや殿よおりゐね
源のかよひ路へも乳母おろち
それうえへもそりおそて二人
ようへ蓼上乃父左大臣殿へかうち
給し

へ尋ねらるよ
問より出給うまいぞともいはくそも
物売ようり給しわなし一ト声

物売ようりしと玉売うりまうる
うし
秘
物売もうこと玉売よなうまあ給まえ
うかり売うまうのいかゞ給う
うしとおりしも四より出たまよ
とく玉売をかりこまねよなうたまて
出給くみうまうへ玉売うりなう
給うへ
第四禁中うて物売うりまうる

いさゝんとも思ふ
秘 我が此事とゝんともおもふ
ん
ふさがりやすくとも涙乃おつく
の治しきことみをろしもよ
ふさがるとも此の行ふ而
白河
築田王衍(エン)院籍(ノ)曰荘(サウ)老道同(キカ)異(コトナル)
荘子将(ノ)二(ト)同(キ)二(ス)仏(ニ)説(ニ)一(ト)
元 ものゝとふらふとて
乃ち
てゝ
りて

人(ヒト)を
并 海のごと
ふのごと
秘 以中
ものゝ
君いふ

お遠うち

女ども(秋)人ぐんとおもひてうるさくて男のわらひやまちよふの事のやうにおもひてそれいたつらのとうをの話し

私云此筆者書写原本我家

とをの話とうるさくてやまち

筆の原の咎うるひてみそこるを

此ふみとそめつくりそれねていたのと

乃ちうみく

筆の名所周親類乃行をそう

うるふみともなきさでつふ事ともなきふみやすき

とや前の話中母親をと

のそうさそくて中絶ひ

しうちけ

いてやそにそき

秘
禽婦乃詞しそ多時ろつつそな
その御言つれそちいいてそ
餐四本拘う早下乃鬼保のと
ひもしそに結接うの許ゆへ
用捨れ様をろ乃美為餐ノ美
私ニ前の秘乃
ちゑ
とうしそれ古風より御
さ斗のにそにいうそや

仇笠屋そち
打
催る系ノ妹
いりかやせうのおてやうゆせうは
ゑをふうして多あさ許
うりあさ屋そち
さてたあさ
うこうもりかうこ
保のれそのうこ

なる心
かくもあるべきも
(元)みそ
の事とて
(秘)
ふ
まことの一円ふ
(秘)
深
いうなる
(秘)
深
世
いとも
幾日
御物
未摘の
てとそ
(も)
みれ

秘蔵年中

そ[illegible]
筆者按ずる
ものやすくへ入る
いかゞもおとろきさう
筆法ノ出ヅヤ会せざる所
する也
ちうくそおりまする
余婦の句法のおもしろき事と
いふ

いなるんきこゑて
帰退すなんし
よりて[illegible]
多やすき
川ぶり景
多やすくそこの句ふりのみをとそ
多ていふし
いとそうとやの
おそうそ法面あれと余婦

れこそねうちもの
箸四ツ荷い来摘み料
とつてまいる
乞い来摘みこゝ
ろ
来摘の仁何ぞ
わうさん（二こゝろ
まつむろ（ともに
れそこそこもろう
来摘の衣裳と
ろうろうさつ
仁ぬきしこゝろ
何仁もなく
ともに
おこといとはさせ
ぼさせねといか
うるさい

(行)花礼(ウヅ)霞(ム)　第四

風流好色乃(ノ)ふるまひ時のうつく

しき女をとりて

ようはき

(行)ようなるしくとはゆくる物し九

そゝそれはきと皆同事し

えひのう

(行)衣服香　又衣(ム)服香(ウヅ)

(行)香を秘云　梅檀樹葉皮春節ニ

為香故　東宮切顔云　葉皮

又薫(ウヅ)香伝云　衣比(エヒ)郎王家方ニ高良衣香

アリ皆ものゝ香ト云一云薫衣香

ノ一名ナリ一云ふくめて薫物名也

笠箒

箒閑そびろ

いうつゝきゝ

掃てちるを払(ハラ)ふ(ハ)ちるをいふ

みのみすさへ
とかうしてい
くそこそ君
ひそといそねる
等(ら)の上(へ)の字濁下乃ごとし
棲遑ノごとし音を創ス義云ふもひ
もろもろし音言と訓する事し未摘
君一切処音言乃事不知其所(ソコ)
等同棲遑と云ことし事不審

何(イカ)ニ日本紀棲遑(セイクワウ)不知其所(ソコ)云々是
云言乃事ニ
日本紀齊明六年皇后其兄
敏(ビン)ニ久メ天皇ノ殺サレトスル時ノ詔ニ
進退(シンタイ)ナリ俯仰(フギャウ)咽(エツ)進退(シンタイ)而血
泣(ナク)日夜懐悒(オモヒナゲキ)無所(トコロナシ)訴(ウタフ)云々行(ユク)
進退のごとくにてとゝまりて
死(シ)ぬ君ノ進
退ニ係(カカ)レルのまけて
悲(カナシ)ミ泣(ナク)ぬるなり云々の心

必来病ようそうて物淀のも
か称つそうて事いそうて
そうくまようそうみ統り云と称
なれいうそうして後物いそね事を
七と物来して云くぞく
泡そう称つそうひて何そも
すもはおおく見そう義日
乃事をもおおく世伝
よもし泡ようのはくとうに

そうてう称つそうて物淀のも
とはまりうそうむおいとそう
ていそねをおいて後物いそね事
絶義そうのとうて威伝的整と
そうそうにまの論義とやもる
せそのなよう通すそ
義それもくそう云うみて
前まくそうけまそうは

そしや

れなりなうひごと
源の就意しまする 業日
かろうろうねんろ
業源の性といふ
一旦ややうどそ
うべまいいふ
かやうろたる
こひそ思ひ
ことと就しそれども人
ようまうそれで来までも思ひ
ますそれまでしそれ源乃
性や

さようこれあるといふ
次中将の源氏朝夜をみそ
うし

九条とみかとう
源氏う 中将の床

独称されてもの
也しかるを陳じ
称するは僭乃至
同じ
但裏より出迎ふと同じ
云ふまでもなく
同じ
ふと以下の文
朱雀院の幸

弁
幷
毅
殺

おそるる
以下の文
也

河
関書曰 黄帝
ひさげけれと
毛車
ひとり車

幷曰 秘曰

れいと称してさけうと
（秘）差出すも以中将乃物語り私
の事ゆえいふ迄もなけれ共時乃事ゆ
秘（秘）義ゆ
（秘）云ふ迄もなく物語り大殿へも
同車しうて
出行うと
或物よりうと大殿へも
つ事を
かしこ
（秘）
（秘）来臨乃ほどうて
雨ふりいて
（秘）
（秘）迎へよ参内をうち乃紀行を
うまをうち
私なうせし事
後朝のみとそ
ねし
おさおさうせし

おうぢんようぢあせびとも
秘 ねりつつし 筆口時々筆を
月まち言い ん ぶ ぐ ぐ うたいいそぐ
それね筆りまいんいそぐうと
せそそをたとひ時ね筆の月とま
いとも同じんなりなぐあなうばば
うぐそもべそそそ せそてそれね筆
の月まいんををしてなり
もも絶えんせよとそ 同書うた

ねとりもそう
しうばうのかそれ
筆口放言陰うの世さりれ時代
乃縛うべしそのかうる紙
や地前 生い硯とそすぐるそ
まんおし 秘日
或物そねとそれとい硯れうねせ
筆れ手のなくのれ物うくそ乃
ありうしせ

私ハ何ヨリモ
ナノノトソレヲ光
ヨリ第一ノ用ノ
ヨイカトイウヨリモ
繁昌ヲ招イテ
ヤサシクテ
スクナイ
ナラバトテ
中ニハ非

大歌そのさま
その法乃書そ
舞うごひみそ
法のとそそ
いそみり
ひそそ
おうびうさく八乃え
笙竹云　律書図云　大簫管
小くく

事物紀原云
其声悲切　本名悲篥尺八
楽書未　以器名一尺八寸云四寸八分
竹云詠尺八云　云聖僧傳曰玄宗前身
羅漢也好吹尺八被擯出之
以上
今の世もよりも大なるものもさ
昔そなりし尺八もえも

說文曰羌人所吹

むるを一大八ぬ
物ありて樂
多いとをくかうらん
秘
花多北勘例
樂記云礼記曰鐘鼓在庭磬堅在
堂延長四年三月廿四日覧舞
樂左大臣時平云作令推大鼓階前
自打之々々今案太鼓ハ必堂下
之事也但寛治五年五月
九典ハ殿上競馬六番の時 瑞川院主上
自打大鼓給此時置堂上也
仍上樂ありと
ありけりと
共おそ
ハいと
松
山代の
せうよおうと
給ひよおうけ

帝物の来たむ
ようう
なてねうう
秘
源と帝物うく
ルそそうして
冈書源のル
うて色ほんと
源のせうう
行さ為ようう

くそそけうんもう
何度クタス
或物ルうくと
くともむル
ルりうさ向ル
この〳〵帝物
物いいて
来たむの物と
るし

ルまりてそ
ルとおりひ事と
ルたものて
ルとおりひ

ここここ
ここここ
ここここ
ここここ

いとあはれそへ
源乃羽
おもひいでねかふ
おもひもつもむの
らくさんあまそし
幾日戀そし
詩曰我秋是伐荊舒是懲（ソラス）
トモ續ノセニコロストニ云
乞い素摘と源乃
乃ねてそう
れもちも忘もも
命婦し
人よりうら迷ひ
幾日逢そうし
てん御物云
玉鉾無て
よそひとは
のきちの

未搦うち
おりしもとてとてに
九かうえんにうけの
手特し
有せさせおくも
九ようけそ
見向そりやうとぶいまうす
しと
けうやうそうう

まてうに
やうとうと
これとうう
秘未搦の奥うう
をうに
秘をうう
をうにうう
未つもをうう
なおしまてもう

さるべきゆゑありてとなく
とは未にむれようくもみえ行そね
とらてよ
山多いひそ〳〵やうみ

竹物墓

秘色磁也越黒し裏色翠青
絶世也唐不得用こく故云
秘色今の青磁ノ茶碗ノ類
陸龜蒙集有越詩九秋風露

越窯同集得千峯翠色来好
向中宵盛況共堪圖
遺址

李訥王記　天暦五六九卿膳沉
香折敷四枚瓶用秘色
これより秘色の名ことく
今案秘色茶碗乃類を
いふし
延喜分内

[illegible]
饗日ひそくい膳物みれも古物
[illegible]
なまりくさひもう
饗日露肩風食れ物し蒜食をそ
秘
[illegible]
さ海し
拝
と給てうなさそ
饗仰云　毛詩廿一羔羊篇退食
[illegible]
自公注饗日退(シリゾク)食謂(イフ)減食(ケラレ)
膳と玉ととを海うとそし
饗日ますてそ
[illegible]
処将ノ
[illegible]
竹のさうひもを膳乃
蒜食とそ物よりを
乃強うのやう
[illegible]
[illegible]

裲襠 ㇾ 無袖 ㇾ 衣 玉篇 裲
徒煩切衣裏有表裏而之如今也
又似之切韻 裲 ㇾ 也 韻會 ㇾ
韻 裲 騎服也 ㇾ 云ひろい字ひろ
の歟と
ひろ ㇾ 多れて
秘
云抑
髪何ㇾ云陪膳ㇾ
ㇾ事 ㇾ 候女房 ㇾ
ㇾ 色とも
ㇾ
ㇾ
ㇾ

トアリ

内侍所

鏡ハ今ノ神鏡ニシテ破ラルヽトモ
元ノ内侍司ノ作ニ成ルヲ以テ皆仮ヲ
ラルヽヤト

鏡ハ守ラルヽヤ
ハタレヲ以テ守ラシムヘシ
鏡ヲ安ク守ル

右宮乃至守護スヘシ

常陸ヲヤ

鏡ハ大唐ノ皇子皇孫ノ諸侯王ヤ
仰ク〳〵ハ重リテ御ス〳〵ル故ニ国家ノ
費過分ニ〳〵ハ群臣諫ル〳〵事指ス
通鑑ニ見ヘリ大唐ノ四百州ス
テ孰如ヤ日本絶ニ六十余国候
ヘ餘慶ハ世光仁ニ定ル〳〵前ニ之仍
故宮ノ未ニ零落ヲ思ヒタリ以ニ此

名犯物指之上丁加二分別也常
時之儀家參務服ノ以下等
勿論之
一 喪中ニ而も無之
一 貴賓御問合等有之節
秘
一 貴賓御問合之節
秘
一 貴賓御問合之節
秘
一 貴賓御問合

(丁)
夷(ニナカニタルセ
夷設岡夷(ヒナブリ)曲日本紀ニ(ヒナブリ)ノ字ニ
いそうまつみうら
うれ(ヒナブリ)ノ字ニ
筆日上ノ羽ニ
ようといつか
者といふ
私云ノ(ヒナブリ)ニ事ニもう
ちかもみ

(戊)
かの物ニおそれ
筆何ニ筆ニそ
もし(般用
ほとの世ニ
筆日仕ニも浪ものニ寝ニ
竹ニ世ニニさニ
ぬれいう
仕ニれ
人言のてニ

秘
深の末にしとねやうみてや
うちとけ泊まりめ
秘
深乃らとんなをすなわて ありひ
てし
なるうちの
筆の当まる花
或物いうたうちとけ泊まりと
いのちうれまて そまる乃地うく
乳筆ノ筆と用へ

まりみうけの
秘
芒うち未摘ゝ
泊物ようまち
筆の山未摘のあうち宝てゝ乳
ふゝみうくしうこ引動
をせうに
せうのあうこうの根うて
それうこ
前の初りまうくうちうを

しきなりや
れいなるそ
ふぎんなりの
象
象四諸佛菩薩各乘物有之
孔雀金翅鳥馬師子象牛皆円
澄之表相ア儿事也象ノ梵ニハ伽
耶ト云那伽ト云異物志云象之為獣
躰特說身倍數牛目不踰冢鼻為
口役望以若尾別良兼散聽言則
跪帝釋象王名壇羅耶身高
九由旬高三由旬之
觀普賢経云普賢菩薩乘大白象
王
鼻如蓮華色二
又云其宝王王
色白柔軟鼻
さそよろこ
小青しろいめそ

[illegible]
[illegible]
[illegible]

清行請禁深紅衣服奏議曰但淺
紅緋黄未及尤色着不在制限
長保元年太政官府云紅紫服堤
防自存中袴直袍下襲之數或
是或用紅或赤用紫誠雖禁深濃
未曾制其淺色今案紅紫いろ
ふかきと禁ふかきとをば
ふかきをいふ淺きをば
紅もゆるしもちゐるなりと
(行)
聽色事 延喜式云紅梅色 紅紫
不以為禮服ト編修ありてを
以二ふかきとよめり今案ゆるしふかき
紅乃薄きを
紫日前物乃今案共以薄延

服衰 和名フルキヌノトイフ歟〳〵
如閑〳〵
西宮云陳時參舞人歸路著黒
服衰〳〵
范江次翁云昔蓄客系入〳〵時童
明親王薨賜蓄宅燒以件衰一領
童見物出間著毛車出入服衰人
持來爲童物見人童大慚〳〵
杜干家九二奉送親云丈佑女府〳〵

文廣詩云季子黒貂弊得云妻
嫂欺汪藹季子子禾用黒貂衰幣
又出遊數歲大困而歸兄弟嫂妻皆
却笑〳〵
又曰兎應疑鶴髮蟾示意服衰斟
酌婦娥寡

天寒奈九秋月待以上髮

秘
むしろをもすする事に避返〳〵
并
うりをもといふ事〳〵

(1)
古代由牙

上古の奏乙

そのまま

多くこれて

出てこちらそ

わうさといて

これさんそちら

図書寮掲乃

(2)
改定

(1)
古代由牙

上古の奏乙

そのまま

多くこれて

出てこちらそ

わうさといて

これさんそちら

図書寮掲乃

かりかそう

中くいそれね

まの乃そ

前乃多とうけ

これさんあもい

そ海そこに

きし記官乃好

河儀式官

秘事

(1)
河儀式官

秘事 物言門記外記史

[illegal]
[illegal]
[illegal]

盡數雪白紛〻幼者死不敬老者
躰亦温悲端与寒氣併入鬼中辛
第四古来此篇之如たるあ
なきものまゝ今此篇と見ていする
み行とゝもに敬して甚深乃
第とゝもに師統よ上件ノ
一部ヵ自然ニ秦中吟ノ全篇ニ
ゆゝもり放ゝもとはゞと頑〻

給しも
れ得とゝもに考えにけるとも
り〻ゆゝもの〻を今〻東深覧
書ノ句し
れゝもなゝもり活ゝ雪ゝもれ
霰雪白紛〻ノ句し
死ゝもゝもそゝもゝもす
ゆゝもゝもゝも

とゝ〳〵はなを邪乃秘よ
悪端ゟ寒気
ゟれ乃ゟないて
第四悪端ゟ寒気併入鼻中章
仕上件の様ゟ〳〵泰中吟に
ク〵しいとゝ〳〵をれぬゟを
のひて未病ゟ鼻乃事とやひ
併仕未病のゟ
とゝひ出ゟ〳〵

鼻ゟ〳〵ゟたゟて章ゟおし況や未病の
鼻いゟて
ゟり文章ゟ
いまゟは〳〵ゟ
乃中ゟ
とあり
秘
ゟ〳〵といゟ
やし元の事と
ゟの様ゟ

秘源の性殊勝
何かやうさ何事
なまこ〳〵奇
よみも仕何いふ
うさまれうね
秘おり〳〵うさ
さ〳〵けうね
秘末摘の性
筆回末摘の

おのこ子生てもと
かくしもそれね
源十七男みそ
くはうけうも
四の位そのね百
源の四裏よおも
百し相当ナル
源十八条の四位
私こうれいまこと四
仕未だ何よ仕
り明年此事也
多くの命婦
未摘花中
此事四
源のけ仕うら
此のとおし
事一ツ事此
大納言婦何

なにさま海の事うと
源乃何
いうこつつの
かしこくも海の
ふうよよこそ
筆口命婦う自分の差すはいう
備乃ようつまうと
さとこめこれを
図書言ノ籠ル事
ひてそくそ差し
えんなりと
源の命婦を数ること作るう
せ
う乃言より
海してこれい
源乃きこふて作る命婦うい
ひるをとう差そこれい海して
うううこつまるの作し

いたうふりて侍ける日
仏のつとめさかりなるに
今朝雪ふりくそといふを
女房よりとて
雪ふりて
ふる人の
いとゞみ

雪ふりて暮方侍ける
おとろきて
雪ふりて
いとゞ
ふる人の
いとゞみ

ひとつ引そへ
余婦の中みく
そいひ〳〵もと
こゝろあ〳〵迷ふんい
源(秘)の句
袖まくらうつ〳〵なる夢ぢ
九源の句
琴(京)何ひて寄ぬ
乃袖まくらうつ〳〵
ひさ阿みそ
来(む)橋の今事し
てはう〳〵そのあ
来橋のとき
もちも
のの
筆(秘)のそりとかは
そも(秘)との指の師と
ちとそ〳〵

也　業同

手ごとに紀ることなり

未揃の一服と称して

行もいでくまりこと

ことなる事ども

潮時ごとに

いふやうなれ

これより未揃の

ことなり　業花云　其梅乃ごと

とりよせて紀もの乃すみ其物を

もりねりこと多れ乃を此法出来れ

其中極文ごとに元ゆゑ多れ

同じ通ると紀乃多れごとく

よりて禁色ごとに元ゆゑ

ふたもりこと

世継云　結子門前を掃ども

てまろうこと

中納言乃局に

練着く寛弘四三五法性寺関白
唐行曲水宴主人忘桃花直衣柳
色指黄山吹出彩袖承久三十一十四五節
童御覧日法性寺関白紅梅落文萠
求手指黄皆紅変　笙笛ノ合
私云秘ノ笛ハ吹ハ吹ハ吹

おつとくろ月うけ
親行（何）祝月うまと
とりかてこうの就こと
苑書写（秘）今業これい命ら婦乃事多見し
添平い月うけうてあてうれ尺
しまつてそ時
まつてする事
物こしにてあうひ伊をけうと

はにおうろ月乗よ之のひてもれ
せんともけりのくうろ乃時よろうい
尺まつてし

幾四命物いまうひさ而よいろな
らものまのの月就そうりよりの
尺てるとやひあいする添の事よ
みうけい悲し 苑祝祖
一年はまうけこ 何苑これとのそ
但苑よいあさけるこまれるこ

皇后 命婦 鼻水事をそひ
合すると
(欠脱字補)
これみれひと花こそ
ひこそこそこれこそ
(訓ヒラスラ)太 将 永 日本紀 (訓ヒロム心) 迟 (訓ヒロム文) 迟 (訓ヒロム) 如 (訓ヒロム) 翼日
(訓ヒロム)命婦う末摘の方へてまる
翌日 翼日
翼日猶くこのことを奇とき将
まってとそこなめう
さみまひうをこれこそ急てすそ
うすることもとめてうこそこそこをて
みう
うま迄ひとうのと
よこにいう将と
ひとてみこに
(訓ヒロム)そうてとこそ
う美しや末摘のいとうのと
命婦うこそこれや迄これや

仕丁等乃まうし一事ノ人（まうそ未
摘の名ところ（ころ）ころ（ころ）ころ（ころ）ころ

秘之派也

春日社

秘

秘 命婦へ仏ゐてとうと思し
みうれひとり
花 源のおひとり
こゝろ女房のわや
秘 思ふ 筆 命婦
すゝやも
秘 命婦
すゝてや一人の女房の
并 こゝろ

筆 命婦う独ごとに
ゐ仏ゐやうや
命婦う出
こゝてう
のゝうとゝ
てゝ
私云源ひとう
命婦うゐ
こゝれとう

宋女官
殿中天皇ノ
時ヨリ始ルト
云ヒ伝ヘシ

汀

接続いたしまして
申上ます
私ども仕事を
いたしまする
或ひは
三井てうの
呉いうような
ふうをいたします
ほかうもうまいります
ほんとうに
ございます

汀

接続いたしまして中宮
申上ます私ども仕事の宴
の手物中へ
左近命婦肥後の
髪口は二人
呉いんさいね女房
くらふ
或ひは
行つてう
そうてひうちの

乃巻よくいふ
第四　和高年よくいふ天武天皇
の朝よりいひ始めて聖武天皇の
時あつめてよくいふ
何よくいふ
私云毎年正月十六日男踏哥
ところ〳〵にて女踏哥を毎
年二月十六日是
ところ〳〵にてひのこと

是ころ〳〵にて男踏哥ありし
まゝを仍ていふ
ありし
さて乃
秘
常陸ふり
みぬのせちゑ
白馬節会
天
天武天皇十年正月七日天皇
小安殿（ヲアド）よ出御ありて宴會

[illegible] 七日の節句
寿 白馬ひろふてなどいふ
ようなことしてあそぶ
源の未摘へおくる
けさひらきよめさ
源の方より未摘乃宮女ともまて
きねことをそうおくりもの
くるさわぎ
君もすこしおもやつれ

阿 阿娜娜(タヽナヽ) 柱仙窟 窈窕(ヨウテウ)

未摘のかりさ衣し
てうたをそうたふ時
未摘乃ふるもかさねを源のかりぎぬ
らはいるゝんと
ゆかしくれいの年
ふとし衣裳をそのうへてらと尺
なとそうあるそよ源の思
ひなをし

周旋

秘
[illegible]
[illegible]
[illegible]

書くる略く
よくしるして新古今
見よ
(行ヵ)
海こそ物いさ
(行ヵ)
ひとの手多
より海こそ
まこそ物いさ
まこそれも
て末摘の新
けおりんと
こそ多ちう
ものひとし
ひとつ書
末摘の句
(行ヵ)
百千多こ
ひとし海
我そうち
る末摘の句

[illegal]
関書葉辛の[illegal]
或物此硯用ゐ
[illegal]
来橋のさ海
[illegal]
二条院よ
来橋よりすく
紫乃君

紫よてこそやれのやうまち
うこひ
紫よ[illegal]
[illegal]
[illegal]
[illegal]
紫乃姫君よ事しこれみみいれ
とりて
紫よれこねの事せ

(秘)花ノ美なるこそねのまし
字書るいこそねし
私云花の美なる未摘の鼻もあこそ
(秘)對して第上の紅梅のみやうや
(イ)梅なるいつなるをいつなるにこそあの
事や
むらんもさこそのうへ
(秘)色いうこそこそ
(イ)梅なるいつなるにこそ(スウ)寵苦し

うそうの細もし幼少女もと
物し
ふるまひとて君もれ
もまうけりと
(む)山海經云東海ニ有黒歯國其俗婦人ハ
歯悉黒ク染
と染日本の中の東海の中の玉し
るふやむ
左右るうのと

さてやみつゝん
紫のゆかりいまさらなれ
そのそひをそして
源のし紫のうへ
つゐとゝんてかつ
ます
うらにいふ
内裏し玉ふ
よのおぼえ

さてのそひ
紫乃村(むらご)のゝ
ゐちごがやうよう
源氏物
平仲(行ー)仲い平ノ頁文ヵ字(ニナ)
ゐさうなうゐ
犯の親よりとい
わしてうくう
女ゐ得て妻とす

梅をもてきこえうけ給はりて
ふるき
おもひ出
我よりてうへおきし梅の
もとにて
こころむかしの
ことなどかたりつゞけ
侍りつるまゝに
こゝろのそこを
大和井川乃行幸の次に入陳院に
幸をぬき奥とよみする多くはせ
むるあやまりにて階隠と作る
ことなり 李部王記に 天慶六年に
尺八楽南階の間にて
とりつたへたるかくしと
いふ風聲をふきすまして
たのしきさまし 音声
まこと

いとうくさくもむしそ
最早開花をも
いろ作さまもり
紅梅みれてエり
(源)くれなゐの色そわるくうとまるゝ梅
もゝえいろうくそ
(秘)美作つし
来摘の事と思のうへくし梅の立枝い
而白それとも来摘い思ひうとまるゝ

うちう先うれ枯
源乃出さ向し
(秘)まる花
関云紫と来つむしの事とくと
いてゝ
毎ないたるいをあるく人北御
約束とありてそ芦あ抱乃北老の
約来摘の事

秘抄ノ奥ノ書トスル
所ナルヲ以テ如此
ノ名アリ
ト云

太守

芳（ニ九）續日本後紀第五ノ巻和五年正
月庚申朔壬申四品忠良親王為常
陸太守従五位下藤原朝臣貞公為介
仁明天皇　諱（下）正良

嵯峨天皇

忠良親王

二男 式部卿 容貞 羨帯
貞観十八年二月薨 五
十八才

ぞ海乃事

天文八年五月十二日議定(ぎぢやう)之(の)とそ
海人の時ぞ一何海よ日本紀を
りて進退のことひけるも
きしうらいて度もそうこと進退
うけて諸国をそ(おそ)おうひそうそ
うはつまそれよそうよ
ふそ今もそいう物ふらひそいう
ふそ(おそ)ふうさふ行みとも 当時皆

ぞ海と云言の様ふりしめて用
ふ皮俗事ふも進退乃ふの名也
処と云ふよふ
ふしてふうそいふふめしくふとう
我ふよ物と云ふことをぞいふ
するとふふのかい仏進退ふなとぞてま
いてとふなふよかふふふふ海と
ふうしてふうそ(おそ)ばぞ(おそ)中(なか)と声(こゑ)を
もふふふ先(さき)仏聲(こゑ)ヲ用ひ

仰ぐと思ひ給へ
そ神のみこと申
私云此歌苦
そそる今云
未はむ花
人(古)これも思へ
未摘花多
顕云紅の
まそほ
私云。顕ハ顕注密勘ニ
万葉ニ
未つむ花の
私云此万葉
そそのそ
とや
私云上件
注。私云万
此私ト云ハ秘ノ奥ノ注スル分
ニ)